
Exit

りす君

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Exit

【Nコード】

N3005B

【作者名】

りす君

【あらすじ】

主人公篠崎とその友達、相川、柿田、越谷は夏休みを利用して肝試しを含めた廃墟探険をする事にした。探険場所は今は廃墟と化していて地域住民からは悪魔が住み着いていると噂されている“呪いの養護学校”だった。怖がちな越谷が柿田に脅かされ、先に養護学校に入ってしまう、篠崎、相川、柿田の3人で一緒に校舎の中へ入った。篠崎は1組の教室を探険していた。すると彼にある恐怖の出来事が起こり、彼は一目散に出口へ行く。しかし、彼らに残酷な運命が待ち受けていた…

Exit 1：俺達は閉じ込められた…（前書き）

この小説をお読み頂き、ありがとうございます。季節外れの作品ですが…どうかそこは突っ込まないで下さると嬉しいです。
では、どうぞ。

Exit 1：俺達は閉じ込められた…

俺、篠崎は夏休みを利用して友達の相川、柿田、越谷と肝試しがてら廃墟探検をしようと、柿田の婆さん家に泊まり込みで来ていた。初日に柿田が熱を出してしまったので、熱が下がってからやる事にした。

治ったのが2日後…つまり今日だ。今日の夜に肝試しをやる事になっている。

探検と肝試しの場所は、今は廃墟と化している養護学校。ただの廃校では無い。その学校は地域住民から悪魔が住み着いている学校と言われている、しかも噂では過去にそこで死亡者も出ているらしいのだ。その噂を信じて、僕達は夜になるまで待ち続けた。

そして、約束の夜になった。

俺達は夜ごはんを食べた後、婆さんが見てない隙をついて家を出た。外は昼間の蒸さ苦しい程の暑さが残っていた。俺は、この肝試しで涼しくなるだろうと思っていた。それが後で違う“カタチ”でなるとは思っていなかった…

僕達は婆さん家から10分程歩き、目的地“悪魔の養護学校”に到着した。

「なあ…何か出てきたりして…」

仲間の内、一番怖がりの越谷が言った。越谷の怖がっている表情を見て熱が下がったいつも越谷にちょっかいを出している柿田は、

「もしかしたら…誰かユーレイに執り憑かれたりして…それがビビリ（越谷）君だったたりして…」

と、脅かしている。相川は冷静に校舎を見つめている。

「さあ、中へ入ろうぜ。」

俺がそう言って一番に校門を乗り越えた。続いて、相川、柿田、越谷の順に門を乗り越えた。

校舎に近付けば近付く程、不気味さが増してくる。また柿田が越谷を怖がらせている。

「おい、聴こえないか…ピアノの音…」

「お、おい、冗談はよせ。何にも聴こえねえよ。」

と、越谷は強がる。柿田は続けて、

「ほおら、車椅子の音も…キシ…キシヤ…クル…」

と、言った次の瞬間…

「うわあああもう止めてくれええええ!!!」

と、叫び声を上げながら越谷は先に学校の校舎内へ入ってしまった。

「お、おい…柿田あ、越谷を必要以上に脅かすなよ!」

と、俺は柿田に叱責した。

「まあ、結果的に中で会える事だし…行こうぜ篠崎。」

と、相川は至って冷静だ。俺は、柿田を反省させてまた歩き出した。

俺達は、到頭校舎の入口の前やって来た。

「入るぞ。」

「ああ。」

息を飲む俺と柿田。相川はそつとドアを開けた。

ドアは、ギシギシと音を立てながら開いた。

「行くぞ。」

「おう。」

と、柿田が言って相川に続き、俺と柿田も校内に入った。

校舎は2階建てで、1階は学級別教室と職員室、2階は移動授業のための教室だった。僕達はまず、1階から探検する事にした。

俺は1組の教室、相川は2組、柿田は職員室にそれぞれ侵入した。

俺は、前の黒板から後ろのロッカーまで調べた。特に何も無く、ガツカリしていた時、

「うわっ！」

と、何かにつまづいて転んでしまった。

「いつてえ…、何だ？ 出っ張り部分にでもつまづいたか？」

と、言っつて足元を見た時、俺は足がガクガク震えて声に出せない程の恐怖に襲われた…

何と、俺の足元には人骨と骸骨むねこつが落ちていたのだ…。

俺は一目散に逃げ出そうとした。しかし、足が動かない。足元を恐る恐る見てみると…人骨が手を造り、俺の足を押さえていたのだ…。

「放せ…放せよ！ 骸骨共！」

と、言いながら僕は足にまとわりついた人骨を払おうとしたその時、

「マッテ…オイテカナイデ…」

と、声がした。更に怖くなり、足から人骨をようやく振り払った俺は教室を出ようとした。その時、目の前に何かある事に気付いた。それを良く見た俺はまた、恐怖に陥った…

「ず、頭蓋骨ずがいこつだけが…ふ、浮遊してる…」

そして、浮遊している頭蓋骨は口元をカタカタ鳴らして喋ったのだ…。

「オニイチャン…アソボッ！…イッショニ…アソボッ！」

僕は錯乱状態に陥り、目の前にある頭蓋骨を吹っ飛ばし、出口に向かった。しかし、そこで俺は、愕然とした…。

「開かない…開けられない…」

何と、俺達が入った入口が外側から鍵を掛けられたかのように閉ま
っていて開けられないのだ…。

俺は即座に相川、柿田を呼んだ。

「何だよ、篠崎い…」

「どうした、何かあったのか？」と、言われて俺はしどろもどろに…

「か…か…鍵…」

「鍵？鍵がどうした？」

「か…か…か」

「あー、もういい！来て損した。戻ろうぜ、相川。」

と、柿田。相川は目を瞑っている。

「何だよ、立ち寝か？」

と、柿田。俺は声を振り絞った。

「…鍵閉められた。」

柿田と相川が、同時にこつちを振り向く。

「開かない…この入口のドアが開かないんだ！」

それを聞いた柿田は、

「うっそだあー、開けられない訳がない。」

と、笑っていた。一方の相川は、

「それは本当か？再度、試したか？」

と、至って冷静に聞いてきた。

「ああ…何度も試したさ。でも、無理だった…。」

と、俺が弱々しく言うのと柿田は、

「ぜってえに開けられるからあ。」

と、ドアノブに手を掛けた瞬間、彼の顔がひきつったように見えた。

「あ…開かねえ…」

と、柿田も弱々しく言った。相川は、落ち着いて冷静に考えようと
俺らを諭してくれた。

こうして俺達4人は出口を封じられ、悪魔が住み着いていると噂さ

れている“呪いの学校”に閉じ込められてしまった…。

Exit2：誰もいない校舎…（前書き）

篠崎と柿田は、依然として姿を見せない越谷を捜していた。ようやく越谷を見つけた2人は背筋が凍りついた…

Exit 2：誰もいない校舎：

取りあえず、俺と柿田は越谷捜しへ階段を使って2階に上がった。外は暗闇に包まれていて、廊下には灯りが一つも無い。

「まあ、廃校だしな。灯りがねえのが普通だ。」

と、柿田が呑気^{のんき}に言っているので俺は彼を置いていき、奥の教室から入った。

どうやらここは音楽室だったらしく、埃^{ほこり}が被ったピアノが残っていた。すると、後から入ってきた柿田が、

「俺に弾かせてみる。」

と、言ってピアノの前に立ち、弾き始めた。スツゴい有名な曲だったので、聴いた途端解った。が、しかし驚い事に柿田のピアノの腕前が凄^{すご}いレベルだった事だ。

「すっげえな。お前、ピアノやってたのか？」

と、俺が聴くと柿田は頭を描きながら、

「いや、俺ん家がピアノ教室だから。」

と、言った。

俺が上手さに拍手したその時だった…

（ガタン）

と、大きな音が隣の教室から聴こえてきたので、何だろうと思い俺と柿田は音楽室を跡にして隣の教室に入った。すると、俺達は一瞬で背筋が凍りつく場面を見てしまった…。

ギシギシと音を立て、ブラブラと揺れている縄に吊されていた物体は紛れもなく、先に校舎の中へ入っていった越谷の首吊り姿だった…

俺と柿田は恐ろしくなり教室を出て、1階にいた相川に今見た事を

話した。

相川は驚きを隠せず、直ぐ様2階のその教室へ上がって行った。俺と柿田は相川を追い掛けた。

2階のその部屋の前で、相川は不思議そうな顔をして立っていた。

「ど、どうした？」

俺が尋ねてみると、相川はドアの方を指差した。

「開いてねえじゃん。てか、この教室を何回見回しても、越谷の首吊り死体なんて見当たらねえぞ。」

と、言った。

教室は間違っていない。しかし、さっきあつたはずの越谷の首吊り死体が無くなっていたのだ。俺と柿田は首を傾^{かし}げた。

「オメエら、本当は俺を脅かそうと、首吊り姿があつたって嘘ついたな？」

と、相川は言ったが俺らは首を横に振って、

「いや、本当にあつたんだ！越谷の首吊り姿が！」

しかし、信じてない相川。

「ぜってえ嘘だろ！…うわっ！何だ？！」

相川の目に何かがつついたようだ。暗くて何かは見えなかったが月光でそれがようやく真紅の血だと解った時は既に遅かった。

俺の横にいた柿田は、いつの間にか突き当たりの壁に寄りかかっていて、身体全体を鋭利な刃物で斬り刻まれて、首が胴体から切り取られていた。彼の遺された身体からは真紅の血が溢れて床に流れ出ていたのだ…。

Exit-final:決して出口の無い未来(前書き)

篠崎は柿田の惨い遺体を発見して恐怖のあまりに相川を残して逃げてしまった。当然、呪われた悪魔の学校はそんな篠崎を良しとはしなかった…

Exit-final:決して出口の無い未来

俺は恐怖のあまり、相川を置いて逃げてしまった。

「の、の、呪われてる!!」

俺は、叫びながら必死で1階の職員室に身を隠した。

この際、相川がどうなろうと俺には関係ない。しかし、職員室のドアが開いて、

(ガラガラガラ)

「おい、篠崎?いたら返事しろ!」

と、相川の声がしたので恐る恐る顔を出した。

「おい、そこにいたのか。」

と、言つて俺に近付いてきた相川は元の相川では無かった。

「会いたかったよ…篠崎。さあ、一緒に行こうぜ…死の世界に!」
そう言つて、相川はどこからか持つてきていたサーベルでいきなり俺に襲い掛つてきたのだ。

俺は避けたが遅く、左腕に切傷が出来てしまった。しかし、痛みを抑えながら必死で逃げた。

どこまでも追い掛けてくる狂人、相川。俺は血を流しながら逃げていたために、行方が解つてしまい、何度も遭遇し、何度も避ける。

しかし、到頭俺は2階の奥の音楽室に逃げ込んだために、もう逃げ場が無くなつてしまった。

「フツ…^{あわ}憐れな奴。さっきの一振りで死ねば良かったものの…さあ、処刑だ!」

でも、俺は最後まで諦めなかった。側にあつた椅子を思いつき窓に投げ、自分自身もサーベルを避けて投げられた椅子が窓に当たると同時に窓にショルダータックルを喰らわした。

“バリーン！！”

それは、一瞬の出来事だった。

心地よい音と碎け散るガラスと共に俺の身体は2階から一気に落ちて、勢い良く地面に叩き付けられた…。

俺はどうやら長い間生死の間を徨迷^{さまよ}ったようで、漸^{よつや}く目が覚めた。
「う…う…」

どうやら誰かに発見されて病院に運ばれたようだ。目が覚めた僕の周りには、家族と医師がいた。

「俺、生きていますか？」

医師は、静かに言った。

「君は生きている。だが…」

「だが？」

俺は聞き返すのが怖かったが聞いた。

「君は発見された時は一人だった。話によると、君は柿田君の祖母

の家に泊まりがけしていたみたいで残りの人達はあそこから発見されてない。」

えっ?!

「しかも、発見された時は廃校だった校舎が自然倒壊していた。」

倒壊…まさか…

「あの!」

必死だった。

「倒壊した校舎の中に俺の友達がいるんです!」

俺は必死に家族や医師に言った。

「まさか!?!」

「本当です!アイツらを放って置けません。アイツらを助けて下さい!」

僕の発言で直ぐ様、倒壊した校舎で依然行方不明の3人の捜索が行われた。そして…数日後3人は無惨な姿で発見された。

越谷は、首にロープで巻き付けられたまま校舎の倒壊で四肢が潰れていた…。死因は圧死では無く窒息死だった。

柿田は、頭が潰れていて脳みそが散らばっている状態で発見。斬り刻まれた胴体は発見されなかった…。

相川は発見された時には、意識があつたが持っていたサーベルで捜査員の前で自殺した…。

結果的に俺だけ生き残ってしまったのだが、俺は次第にノイローゼになり、人との面会を拒み続けた。

ついに、俺も生きているのにも限界に達し、見張りの居ない隙に病院の屋上に行った。

夏なのに風が気持ち良く吹いて涼しかった。

僕は呟いた。

「ゴメン、父さん、母さん。そして、越谷、柿田、相川…今逝くよそっちへ…」

最後は、死に対して何も抵抗は無かった。

俺はフェンスを乗り越えたと、下のコンクリートへ飛び降りた…

Exit-final:決して出口の無い未来(後書き)

今まで、読んで頂きましてありがとうございます。正直これは、短編系なのか長編系なのか自分でも解らなかつたのですが、まあ…何とか終わらせました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3005b/>

Exit

2010年12月10日20時51分発行